

深刻な大気汚染に悩まされる中国では、子供たちはみなマスク姿。



最高気温25・3℃。東京都心では観測史上最も早い夏日となった3月10日、真っ青に晴れわたっていた空が突如、黄色く染まった。当初、黄砂とも報じられたが、その正体は「煙霧」。午後になって強まった風によって地上の砂埃が巻き上げられたことが発生

PM2.5+花粉で！さらに微小1.0に殺人度はUPする

の原因だった。

しかし、強風と黄色く濁る空は、大気汚染問題が叫ばれている中国から飛来するPM2.5への恐怖を募らせた。

埼玉大学の王青隴准教授（環境科学）が説明する。

PM2.5とは粒径2・5μm（1μm＝マイクロメートル）は1000分の1（1mm）以下の粒子の総称で、主に硫酸塩や炭素粒子、金属粒子などが含まれています。

ぜんそくや気管支炎、呼吸器系のがんのほか、動脈硬化や心臓疾患、脳梗塞などを誘発する危険性があります。

子供やお年寄り、妊婦は特に注意が必要です。

殺人物質とも呼ばれ、濃度が1㎡あたり10μg（1μgは1000分の1mg）増えること

に肺がんによる死亡率が15～27%増

加したという研究発表もある。

西から東への偏西風に乗る1月28日午後以降に大陸から九州地方へと襲来すると、PM2.5汚染はあつという間に日本全国へと広がり、2月5日には北海道でも日本の環境基準（1日平均、1㎡あたり35μg）を超える値が観測された。

環境省は、今月末から5月ごろまで濃度が高めの状態が続く可能性があるとの分析している。

そして花粉が舞う今の季節こそ、より一層注意しなくてはならないことがある。PM2.5は花粉にくっつくと、花粉がいっぱい。爆発して、さらに微小な「PM1.0」が発生してしまうのだ。前出

王准教授が説明する。「PM2.5に含まれている硝酸塩が花粉にくっつくと、水分が花粉にどんどん入り込み、やがて爆発します（右下イラスト参考）。すると、その衝撃で、花粉と一緒にPM2.5も砕け散り、1μm以下の物質「PM1.0」となってしまうんです」

目に見えないところか、通常のマスクでは遮ることのできないPM1.0となった有害物質や花粉片は、呼吸などによって肺のもつとも深い肺胞にまで取り込まれていく。そのため、これまで花粉症に

なったこと

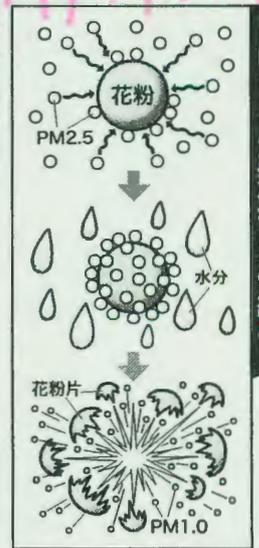
のなかった人にもアレルギー反応が出たり、呼吸器系の疾患や発がんの危険がより高まるなど殺人度はUPしてしまつのだという。

基本的には通常の生活スタイルでは防ぎようがないが、せめてもの対策はないのか。「手洗いやうがいでは効果がありません。

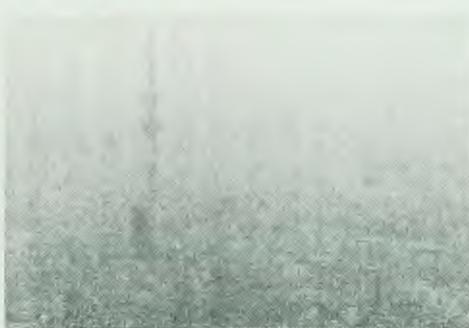
体に入らないように外出する時は高性能の防じん用マスクをして、帰ってくる時も外で上着をはたいて少しでも室内に入れないようにする必要があります。

室内にはたくさん花粉や有害物質が落ちている可能性がります。それらを巻き上げてしまつ掃除機などは厳禁です。

代わりに、水拭き、から拭きと2度拭きしましょう。また、エアコンは外の空気を中に入れてしまつので、なるべく使用は控えた方がいいですね。どうしてもという場合は、フィルターなどをきれいに掃除してから作



PM1.0が発生する仕組み



煙霧でかすむスカイツリー。（3月10日）

防衛はまず不可能、肺がんのリスク高まる恐怖

動させてください」（前出・王准教授）
一般の家庭でこれを徹底するのは至難のわざだが、できる限りのことはしておきたい。ここ最近暖かくなつてきて、桜のつぼみもふくらみ、お散歩日和になつてきたのに、これでは外に出るのも怖くなつちやいそ（涙）。